



交通事故を防ごう！

－「行動する前に考える」ことの習慣化－

JAF Mate という雑誌で、「7歳が危険！登下校時の事故」という記事を見付けました。その記事によると、歩行中の事故による死傷者数を全年齢別に見た場合、歩行者に違反のないケースも含め、「7歳」が突出して多いのだそうです。この原因としては、小1となる7歳は登下校をはじめ、保護者と離れて一人で行動する機会や範囲が一気に広がり、交通ルールや安全な行動、危険の察知などが身に付く前に、事故になってしまっているのではないかと言っています。



特に低学年の子供には、「横断歩道を渡る」などの交通ルールを教えることはもちろんですが、それだけでなく、「自動車が横断歩道の前で止まってくれるのを確認してから渡る」などの危険回避行動まで教える必要があるということです。

この記事の中で、大阪国際大学人間科学部の山口直範准教授は、「発達心理学的には、就学前後の子供の特徴として、情動のコントロールが難しいとされており、飛び出しなど衝動的な行動は当然のこと。コントロールできるようになるのは小学校高学年くらいからなので、就学前に保護者が子供と一緒に通学路を歩いて、安全な横断方法などを実地で教え、習慣化することがとても重要です。トイレに行ったら必ず手を洗うなどと同様に習慣付けることは幼児でもできます。『右見て、左見て、右』と教えても、ただ左右に首を振っただけで、車を見ていないこともある。必ず手前で立ち止まり、『車が来ていないか、よく見てね』と、自分でよく『見て、考える』ことを習慣付けることが最も大切です。」と言っています。



衝動的な行動を、「考える」ことの習慣化によって防ぐという方法が効果的だという意見は、昨年度の「境野小だより 3月号⑩」で書いた「行動する前に考える習慣を身に付けさせることが大切」という私の考えと似ていて、うれしく思いました。

交通安全のためにも、「行動する前に考える」ことの習慣化を目指しましょう。(1年生だけでなく、中・高学年も、です。)

えらいぞ！お兄さん、お姉さん。

登校時に小さい子のめんどうをよく見てくれる子が、たくさんいます。

昨年度も思ったことですが、朝、子どもたちの登校の様子を見ていて、感心することがあります。それは、兄弟と一緒に登校してくる子のお兄さんお姉さんが、弟や妹のめんどうをよくみながら登校してくる事です。「道路の端を前を見て歩くこと」「道路を横断するときは、必ず左右の安全を確認すること」などを、きちんと教えてくれています。

「行動する前に考える」ことの習慣化につながると思います。